写真1 上部白亜系サントニアン階のウルゴン相生礁をつくる二枚貝 *Hippurites* (Toulon 北西方, la Cadière)
Hippurites の固着殻は長さ 50cm に達し、層理面に対し斜めに倒れているが、生息時の相互の位置関係はほぼ保たれている。殻の複雑な内部構造や中を埋める二次方解石がみえる。

写真2 模式地におけるバレミアン階ウルゴン相のヒップリテス生礁表面(前景)とOrgonの町
写真左上方の崖は始新世の淡水性石灰岩。

写真3 二枚貝 *Hippurites* のつくる礁の断面(写真1と同じ礁) 筒状の殻は堆積物の表面から離れるように曲って成長している。

写真4 Toulon北西方, Gros Cerveauのコニアシアン階ウルゴン相礁性石灰岩
厚い粗粒砂岩(斜面の部分)上に重なる。

南フランス模式地付近のウルゴン相石灰岩 Urgonian Limestone in the Type Area, Southern France

ウルゴン相(Urgonian Facies)は、二枚貝のヒップリテス類(rudists)のつくる生礁とそれにとまう種々の碎屑性石灰岩層の総称で、カリブ海メキシコ湾岸域から地中海岸、中近東などの白亜系中にみられる。初めD'ORBIGNY(1847)によって、下部白亜系の階名として、南フランス Avignonの南東20kmのOrgon(UrgonはOrgonのラテン語綴り)付近に分布する石灰岩層に対して命名されたが、後に上記のような特定の岩相を示す語として使用されるようになった。中東では、ウルゴン相の礁性石灰岩が主要な石油の貯溜岩となっていて、経済的にも重要である。ヒップリテス類は、中生代後半に生息し、特に白亜紀にテチス海域で大発展した特殊な形態の絶滅二枚貝類で、両殻が巻いたもの、一つの殻が他物に固着して杯状または樽状になり他殻が蓋のようになったもの、写真1, 3に示すように固着殻が長くのびたものなど多様な形態の種類がある。

ウルゴン相は、模式地を含む南仏地中海岸では、海岸に平行にのびる白亜紀堆積盆の縁辺やその北に広がる大陸上の浅海相中に現われる。ここでは礁性石灰岩は厚さも広がりも貧弱で、写真4に示す例のように厚さ10~30m、延長は50~500m程度のもが多い。弱い層理の見える石灰岩の所々にヒップリテス礁がある。1つの礁はふつう厚さ1~2mどまりで、そこでは層理面に対して立った多数の個体が密集して生礁をつくっている。石灰岩体は、そのような生礁とミクライト質または粗粒の碎屑性石灰岩の不規則なくり返しで構成されている。ミクライト質石灰岩の中には、横転したりこわれたヒップリテス類の殻が散在することが多い。また礁湖相のチョーク中には、小型で両殻の大きさがあまり変わらないタイプのヒップリテスが点在する。造礁性サンゴほかも共存するが量は少ない。

(鎮西清高撮影 Photo by K. CHINZEI)